

[31] ボリショイ・バレエの変革

～時代と様式～

1995年5月19日 東京新聞 夕刊

ちょうどモスクワへボリショイ・バレエを見に行こうとしていた矢先、芸術監督のグリゴロヴィチが辞任したというニュースが入ってきた。ユーリー・グリゴロヴィチはこの三十年間ボリショイ・バレエに君臨してきた演出振付家である。『石の花』『スパルタクス』『イワン雷帝』など、テクニックを駆使した豪快な傑作を作り、世界に冠たるボリショイ・バレエを統率してきた。その彼がいなくなったらバレエ団はどうなってしまうのか。

しかし現地のモスクワで見聞したところでは、これはグリゴロヴィチ個人の問題というよりもっと大きな視野に立った劇場運営にかかわる改革なのがある。

この発端は、ボリショイ劇場全体の人事に契約制を導入しようという政府の判断にあった。これまでボリショイ劇場では、総裁が事務的な運営にあずかる一方で、公演の内容に関しては音楽、舞踊、美術の芸術監督がそれぞれに全権を握っていたのだが、ロシアには定年という考え方がないために芸術監督の権限をコントロールすることが不可能だった。そこで事務部門と芸術部門の上に立つ「総監督」のポストを新たに設けて、全体的な視野で公演内容の充実に図り、同時に劇場でのすべての雇用を契約に切りかえることにした。

[31] ボリショイ・バレエの変革

～時代と様式～

1995年5月19日 東京新聞 夕刊

その総監督に任命されたのがウラジーミル・ワシリエフである。かつてのボリショイのスター・ダンサーで、最近はバレエ『アニュータ』などの演出振付で活躍していたが、舞台芸術を熟知しているという点でも、世界的な知名度、また大方の信望という点でも、彼ならばまず文句の出ない人事だと判断したのだろう。

もっとも彼のポストは、いわばこれまで学部長と事務局長だけだった大学にトップとして学長を置いたようなものだから、ダンサーや振付家としての能力を買われたわけではない。また必ずしもグリゴロヴィチの後任というわけでもないのである。これについてワシリエフ自身「自分のキャリアの最終目標としてボリショイ・バレエの芸術監督を考えてはいた。しかしこういう仕事をするとは思わなかった」と苦笑まじりでもらしたとおりである。

新総監督ワシリエフが熱っぽく語ったのは、二百年の伝統ある「精神の殿堂」を守りぬくことの意義、劇場で働く人々への保証、音楽・美術・舞踊の各ジャンルが一体となって良い舞台を作ることの必要、また世界のアーティストを招いてボリショイ劇場の公演を多様化していこうという将来計画だった。要するに、この先ボリショイ劇場は、伝統を守りつつも新しい試みに向けて開かれていくことになるのだ

[31] ボリショイ・バレエの変革

～時代と様式～

1995年5月19日 東京新聞 夕刊

と思われる。たしかにグリゴロヴィチ支配の長期化でボリショイ・バレエのスタイルは固定化し、ダンサーの起用にも独善的なものがあつたことは事実だ。

ところで今回のこの改革は、実はボリショイだけの問題ではなく、大都市の大きなオペラ・バレエ劇場に共通の問題を含んでいる。

もともとバレエでは、カンパニーは劇場に付属していて、芸術監督（メートル・ド・バレエ）が全権をもってすべてを仕切ってきた。演目を決め、振付をし、配役を決め、リハーサルを指導する。有能な振付家の場合には任期は二十年、三十年の長きに及んで、統一されたスタイルの作品を数多く残し、固有のメソッドを練り上げる。そういう作品のレパートリーを豊かに揃えることが、それぞれの大劇場の黄金時代を作ってきたのである。古くは十八世紀デ・ンマークのブルノンヴィル、十九世紀初頭フランスのガルデル、十九世紀末ロシアのプティパ、二十世紀中葉フランスのリファールなど、みなそのようにして優れたバレエ芸術を完成させた巨匠である。そういう意味では、グリゴロヴィチはいわば最後の巨匠だったと言えるだろう。

しかし時代はもはやそのような芸術監督の存在を許容できなくなっている。交通の発達とともに、大

[31] ボリショイ・バレエの変革

～時代と様式～

1995年5月19日 東京新聞 夕刊

都市には毎日のように世界各地からバレエ団が訪れ、最先端の振付家の作品が紹介される。単一のスタイルを固持しては世の中に遅れをとってしまうのだ。そこでパリ・オペラ座でも英国ロイヤルでも、古典と同時にレパートリーに多くの作家の現代作品を揃えるようになってきている。

ボリショイ・バレエも時代の趨勢で路線を変えようとしているわけだが、しかしそれで損なわれるものもないとは限らない。たとえばグリゴロヴィチが三十年かけて丹精した独自のメソッドとスタイル。三月にモスクワで見た新版『海賊』も、物語が整理されて、いかにもボリショイらしいダイナミックなバレエに仕上がっていた。またダンサーたちの、あの重心が高く、足が見事に長い肢体の爽やかさ。これこそはメソッドの成果、修練に磨かれた独特のスタイルである。リフトとジャンプをたっぷり取り入れたボリショイの動きは、何と言っても二十世紀のクラシック・バレエの頂点を示すものだった。

すべてのものは時とともに移り変わる。芸術様式もまたしかり。とすれば、この七月に行われるボリショイ・バレエの日本公演は、私たちが純正なクリゴロヴィチ＝ボリショイ・スタイルを見る最後の機会になるのかもしれない。その舞台を眼にしっかり焼きつけておきたいと思っている。

[31] ボリショイ・バレエの変革

～時代と様式～

1995年5月19日 東京新聞 夕刊